

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録 (2013.03) 平成23年度:90-91.

放射性ヨード内用療法を受ける患者の気分と身体症状について
～治療未経験者と治療経験者の経時的変化～

佐川雄太、大塚麗奈、尾形千悦

放射性ヨード内用療法を受ける患者の気分と身体症状について ～治療未経験者と治療経験者の経時的变化～

10階西ナーステーション ○佐川 雄太、大塚 麗奈、尾形 千悦

キーワード：放射性ヨード内用療法、甲状腺癌、気分調査、経時的变化

【はじめに】

甲状腺癌の治療の一つに、放射性ヨード内用療法（以下、RI治療）がある。RI治療は、他者への被曝の観点から、放射線管理区域病棟（以下、RI病棟）に隔離される。また、ヨードの集積性を高めるために、治療2週間前よりヨードを制限する。同時に、甲状腺ホルモン剤を休薬し、多くの患者に甲状腺機能低下症状が出現する。過去の研究において大塚ら¹⁾は、RI治療を受ける患者の気分と身体症状について、経時的に検討している。しかし、対象は治療経験者と未経験者が混在した状態での研究であった。本研究では、未経験者と治療経験を分け、心理的状态と身体的状態の経時的变化を明らかにしたいと考えた。

【方法】

1) 対象期間：平成21年4月から平成22年12月。2) 対象：甲状腺癌患者でRI治療を受ける患者43名。治療未経験者をA群（20名）、治療経験をB群（23名）とした。3) 調査方法：心理的因子は、坂野らの「気分調査票」²⁾を用いて緊張と興奮、爽快感、疲労感、抑うつ感、不安感の5因子と、患者から訴えの多かった症状の嘔気、倦怠感、不眠、臭気、食欲の5因子を身体的因子として研究者が抽出し調査した。各項目「全く当てはまらない」1点「当てはまらない」2点「当てはまる」3点「非常に当てはまる」4点の4段階で評価し、質問紙調査法にて患者が自己記入した。調査の時期は、入院日、RI治療前日、RI治療当日、RI治療2日目、RI治療3日目、RI病棟退室後とした。4) データの分析方法：集計したA群とB群の各項目の経時的变化の評価については、入院日のデータを基準としてWilcoxonの符号順位検定を用いて評価した。いずれも $P<0.05$ を統計学的に有意差ありとした。さらに、それぞれの項目の総合得点から平均値を算出した。

【倫理的配慮】

対象者に無害である事、プライバシーの保持、個人が特定されないよう匿名性を確保した。自由意思で研究参

加できる事を口頭と書面をもって説明し同意を得た。所属の倫理委員会の承認を得た。

【結果】

結果は表1に示す。表1は平均値を表したものであり、有意差を認めたものを*印で表した。

【考察】

B群ではA群と比較し、多くの項目で有意差を認めた。不安は、A群に有意差はなく、B群ではRI治療3日目で有意差を認めた。RI病棟退室は、3日目の線量結果によって決定する。過去の経験より、退室決定結果を予測した反応が考えられた。

緊張と興奮は、B群でRI治療当日とRI治療3日目に有意差を認めた。これは治療前や、RI病棟退室前の緊張が影響した可能性が考えられた。

疲労感は、両群ともにRI治療2日目、3日目で有意差を認めた。食欲不振は、A群はRI治療2日目、3日目で有意差を認め、B群はRI治療前日から退室後に至るまで有意差を認めていた。多くの患者は、治療中「ムカムカする」と訴える。甲状腺機能低下症状や、ヨードの副作用と関連する嘔気でも有意差を認め、これらが疲労感と食欲不振に影響した可能性が示唆された。

我々は、患者と関わる中で「昆布を身体に巻きつけられた様な匂いがする」という訴えを聞くことがある。嘔気誘発原因の一つである臭気は、A群はRI治療後3日目で有意差を認め、B群は、RI治療当日から退室後まで有意差を認めた。ほぼ同時期にかけて、抑うつ感も有意差を認めている。患者にとって気分的な苦痛に影響し、同時に嘔気・食欲不振にも影響していたことが示唆された。

患者は、RI病棟退室時に、一般病棟への扉を開けると「気持ちが晴れた、出た瞬間に良くなった」と表現する。身体症状は残存しているが心理的因子は、両群とも退室後に全ての有意差が消失していた。患者は、RI治療が終了したこと、RI病棟から出られたことへの安堵感から至った結果であることが予測でき、両群ともに、RI病

表1. 心理的因子・身体的因子の平均値 (*P < 0.05、**P < 0.01)

(項目) (群)	入院日		前日		当日		2日目		3日目		退室後	
	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B
緊張と興奮	14.9	13.7	15.4	14.4	15.7	15.6**	15.8	15.2	15.6	15.4*	15	15.3
爽快感	17.9	19.9	18.4	18.2*	18.5	19.7	17.7	17.9*	17.7	18.7	18.2	18.6
疲労感	14.5	14.2	15.6	15.3	15.3	15.3	17*	17.7**	17.2**	16.7**	15.5	15.7
抑うつ	14.9	14.5	16.2	15.5	14.9	16*	16.4	17.4**	16.8*	16.8*	15.4	15.2
不安	17.2	16	18.2	16.3	17.6	17	18.1	17.6	18	17.6*	16.4	17.6
食欲不振	1.8	1.9	1.9	2.4**	2	2.1*	2.6**	2.7**	2.6*	2.7**	2.2	2.6**
嘔気	1.4	1.7	1.9*	2	1.9	2	2.3**	2.5*	2.4**	2.5**	2.0*	2.1
不眠	2.1	2	2.3	2.2	2.3	2.2	2.3	2	2.4	2.0	2.3	2.4
倦怠感	2.1	2.2	2.2	2.4	2.0	2.2	2.4	2.6*	2.4	2.0	2.1	2.4
臭気	1.7	1.8	1.9	2.0	2.0	2.3*	2.2	2.8**	2.5**	2.7**	2.2*	2.3**

棟での生活は、心理的にも身体的にも苦痛を伴うことが示唆された。

【結論】

1. B群は心理的、身体的因子の項目でRI治療前、治療中において、A群よりも多くの項目で有意差を認め、心理的にも身体的にも多くの苦痛を感じていることが示唆された。
2. 身体的因子は、退室後も有意差を認めた。反面、心理的因子の有意差は、退室後に消失し、隔離環境であ

るRI病棟から退室できたことや、治療終了の安堵感が影響していることが予測された。

【引用文献】

- 1) 大塚麗奈他：放射線コード内用療法を受ける患者の気分と身体症状の経時変化 第40回日本看護学会論文集 看護総合、P18, 2009.
- 2) 坂野雄二他：新しい気分調査票の開発とその信頼性・妥当性の検討、心身医学、34、629-636、1994.